

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：37104
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：25670985
研究課題名(和文) 発達障害児の母親のレジリエンスに焦点をあてたメンタルヘルスケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a Mental Health Care Program with a Focus on Resilience for Mothers of Developmentally Challenged Children

研究代表者
舞弓 京子 (Mayumi, Kyoko)
久留米大学・医学部・准教授

研究者番号：50352191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、発達障害児の母親のレジリエンスとその影響要因を明らかにし、レジリエンスを育むメンタルヘルスケアプログラムを作成することである。平成26年は、面接調査を実施。育児中の母親の葛藤と対処プロセスを分析し、8つのレジリエンスを明らかにした。平成27年は、オランダ視察(親の会、コーディネイト団体、小学校、職業訓練校など)を行った。平成28年は、6月に支援者対象の「オランダの子育てについて」の研修会を実施し、メンタルヘルスプログラムへの協力者を得て、平成29年1月～3月(月1回)託児つきの研修会とグループワークから構成されるメンタルヘルスケアプログラムを企画し、実施した。

研究成果の概要(英文)： This research aims at bringing to light factors involved in resilience building among mothers of developmentally challenged children and at creating a mental health care program to foster resilience. In 2014, interview surveys were conducted and the conflicting feelings and coping processes of childrearing mothers were analyzed. Eight types of resilience were found. In 2015, a visit to Holland was undertaken to observe parent associations, project groups, elementary schools and vocational training schools. In June of 2016, a workshop “Childrearing in Holland” was held for supporters of this project and collaborators were obtained. From January to March of 2017 (once a month), a mental health care program involving group work and workshops including children was planned and put into effect.

研究分野：精神看護学

キーワード：発達障害 レジリエンス 母親 メンタルヘルス

1. 研究開始当初の背景

(1)平成 17 年 4 月の発達障害者支援法の施行により、発達障害児の早期発見・早期支援や、学校教育での支援体制の整備、また就労支援などの充実が図られることになり、家族支援も重要な対策をとった。ペアレントトレーニングなど教育するプログラムや親の会を通じた仲間づくりの機会が提供されるようになってきた。

(2)一方、早期発見の功罪として、障害の軽症化や消失といった過剰な期待により、親は焦り、落ち込み、傷ついている現状など発達障害の子をもつ母親の育児ストレスは高く、障害を受容する連帯感が生まれる一方で、お互いの状況を比較し、差異を実感することで、孤独感を助長する事態も生じていた。

(3)母親への支援は、外部支援も重要であるが、母親自身が困難な養育環境で生じるさまざまな葛藤を柔軟に対応する力であるレジリエンスを育むことが、母親の健やかなメンタルヘルスには不可欠であると考えた。常に母親は子どもと共に養育者として対象化され、母親個人を包括的にとらえた研究は少ないため、本研究では母親に焦点をあてた。

2. 研究の目的

(1)平成 25・26 年度 母親面接調査

母親の社会的役割という側面から、役割遂行時に生じる葛藤や対処するプロセスについて明らかにする。

対処プロセスの中で、形成されていく母親のレジリエンスを明らかにし、影響要因について考察する。

(2)平成 26 年度 オランダ視察

オランダにおける発達障害児・母親の支援体制について施設を視察することにより、

日本における母親支援プログラムの検討に活用する。

(3)平成 27・28 年度 (プログラム実施)

発達障害児の母親のレジリエンスに焦点をあてたメンタルヘルスケアプログラムを作成し、実施、評価する。

3. 研究の方法

(1)平成 25・26 年度 母親面接調査

用語の定義：レジリエンスとは、通常「跳ね返す力」と訳される場合が多い。本研究では、「人が逆境に見舞われ、エネルギーを消耗した後も、それを再び取り戻すことのできる能力。しっかり生きることによって成長していく能力を意味する」と捉える

研究対象：A 市内の中学校でタイムケアを利用する発達障害者の母親、または発達障害児(者)親の会の会員に、研究の目的・方法を説明し、承諾の得られた 9 名。発達障害者の母親への面接にしたのは、客観的に幼少期の事を振り返ってもらうためである。

研究期間：平成 26 年 5 月 26 日～平成 27 年 3 月 31 日

研究方法：半構成的質問紙を用いた面接調査。面接場所は、個室でプライバシーの守れる場所で、面接時間は 1 人約 1 時間から 1 時間半とした。面接開始時に、再度研究の目的、方法について説明し、同意を得た。面接内容は、対象者の許可を得てメモと IC レコーダーへの録音を行った。面接内容は、基本属性(年齢、家族構成、発達障害をもつ子供の生育歴)、日常生活での葛藤と対処のプロセス、母親の役割機能(母、妻、嫁、娘など)母親の役割機能の遂行状況と葛藤、葛藤への対処について尋ねた。

分析方法：面接内容を逐語録にし、木下らによる M-GTA(修正版グランデットセオリー)を用いて分析した。

倫理的配慮：研究協力施設・団体に対して、研究の目的・方法について十分説明し、同意

を得た。対象者には、面接開始時に再度文書と口頭により、研究の目的・方法について十分に説明し同意を得て開始した。研究への参加は任意であり、参加しなくても不利益は被らないこと、同意した後も、撤回できること、個人情報の保護に努めること、面接中・後の心理的サポートに努めること、研究成果は、個人情報の保護を厳守して、公表すること、費用負担はないこと、メンタルヘルス維持・促進のためのプログラム作成の基礎的研究となること等を説明し、久留米大学倫理委員会において、審査を受け承認後、調査を開始した。

(2)平成 26 年度 オランダ視察

期間：平成 27 年 2 月 14 日～2 月 21 日

視察場所：ハーグ市を拠点に視察。初等学校 (De Regenboog) 発達障害児保護者団体 (Balans)、特別支援学校 (De Bonte Vlinder)、現場訓練校 (De Einder)、児童精神病院、就労施設カフェ、アトリエ (GGZ Central Ermelo)、障害者支援団体 MEE、教育・労働・住施設 (Cello) を訪問した。初等学校、Cello では実際に通学している発達障害児の母親にインタビューする機会を得た。通訳とコーディネーターは、オランダ在住の社会教育学者であるリヒテルズ直子氏に依頼した。

(3)平成 27・28 年度 (プログラム実施)

母親の面接調査、オランダ視察の結果をもとに、母親のメンタルヘルスケアプログラムの作成と実施、評価を行った。作成にあたっては、支援者の意見も反映させるために、地域の子育て支援に関心がある協力者を募るため、講演会とオランダ視察報告会を開催した。

講演「自律と共生を学ぶオランダの教育」
講師：リヒテルズ直子氏 (オランダ在住教育・社会研究家) 舞弓京子「オランダにお

ける発達障害の子どもをもつ母親への支援」を報告。

日時：平成 28 年 6 月 15 日 18:00～20:00

場所：久留米大学医学部看護学科

メンタルヘルスケアプログラムを作成

講演会の参加者から協力者を募り、多職種からなるプロジェクトチーム Tunagu を結成した。学習会を重ね、プログラムを作成した。作成にあたり、公文眞由美氏 (福岡県発達障害者センターあおぞらセンター長) に、スーパーヴァイズを依頼した。

プログラムは、面接調査、オランダ視察の結果から 3 つのコンセプトで構成した。

テーマ「語って・わかって・つながろう」

a. 語る：母親自身が育児に関する思いや体験を語ることにより、他者との思いを共有し、安心、喜びの体験となると考えた。

b. わかる：1 つのテーマについて学習し、具体的に活用できるようになる。各回テーマを決め、専門家を招聘し講義の後にグループワークを行い、活用できるようになるレベルまで考える。

c. つながる：毎月 1 回の 3 回シリーズで実施した。スタッフや母親同士の関係性ができると考えた。ニュースレター作成や、前の回で学習したことの活用状況についてアンケート調査を行った。

また、母親にくつろいで、集中して参加してもらうために、託児を同時に行った。託児は保育士、看護師、心理学科学生、看護学科学生のボランティアで実施した。

メンタルヘルスケアプログラムの実施

場所：久留米シティプラザ 大会議室

実施：毎月 1 回、1 つのテーマを設定する。オリエンテーション 5 分、講演 45 分、休憩 10 分、グループワーク 60 分 (発表、アンケート含む) の 2 時間のプログラムである。グループでは、精神看護でファシリテーター経験者を、ファシリテーターとして置き、グループワークをすすめた。意見や質問等は、グ

ループでホワイトシートに書きこみ発表した。和やかな雰囲気作りにカフェを設置した。

a. 第1回 「行動から読みとろう」

日時：平成29年1月21日(土)9:50~12:50

講師：日野久美子氏(佐賀大学大学院学校教育研究科 教授)言葉によるコミュニケーションではなく、行動を読み取ることでメッセージを理解することを学習した。

b. 第2回 「遊び方を工夫する」

日時：平成29年2月11日(土)9:50~12:50

講師：林智香子氏(こぐま学園児童発達支援センターゆう 園長)子どもと実際に遊ぶ演習も含めた。また父親参加も行った。

c. 第3回 「関わりを考えよう」

日時：平成29年3月11日(土)9:50~12:50

講師：公文真由美(福岡県発達障害者支援センターあおぞら センター長)コミュニケーションと一緒に、生活リズムを作ることに重点を置き講義を依頼した。

4. 研究成果

(1)平成25・26年度 母親面接調査

対象：母親の年齢は40代5名、50代4名。子の年齢は16.1±2.7歳。性別は全員男子。診断はアスペルガー障害4名、広汎性発達障害3名、自閉症1名、ADHD1名であった。

発達障害をもつ子の母親のレジリエンス母親が子育てするプロセスにおいて、「子の1番の理解者」と考え、「一人で多重な役割を奮闘」しながら、「子を守るために闘う」毎日であった。しかし、「予測不可能な事態への対応」を求められることが多く、理解のない他者や医療者、協力しない家族など「周囲への怒り」を感じている。「子の将来への不安」に対し、「話を聴いてもらえる安堵」や「障害の壁を取り除く」ことが、8つのレジリエンスとして捉えた。なお、対象人数が少ないことや、カテゴリーの表現について今後も検討していく予定である。

(2)平成26年度 オランダ視察

視察した結果、ワークライフバランス先進国であるオランダと日本との相違点について以下に述べる。

育児時間の確保と支援者確保が可能：オランダは、就業時間が子どもの成長にあわせて選択でき、パートタイム労働がフルタイム労働と同じ条件で就労できること、ワークシェアリングが発達しており、家庭における育児時間を確保することが重視されている。就業時間は午後3時で終わる所も多く、その後は家事や別の仕事、ボランティア活動に使うというライフスタイルが多くの国民の間に浸透している。そのため、仕事と育児の両立はもとより、ボランティアの協力を得ることができる体制が整っている。

子どもの成長にあわせた選択が可能：オランダは、公立私立を合わせ、さまざまな特色をもつ学校が存在している。子の能力にあった学校を自由に選択でき、また進度(留年)を選択することも可能である。画一的授業ではなく、子ども個々の能力に応じた指導が実施されている。子の学力に関する記録はデータ化され、親は専門教員と話し合い、検討が行われている。

親の主体性を尊重したネットワークの構築：日本では、母親が役所や施設、医療機関を周り、社会資源を求めて相談していくシステムである。しかし、オランダは母親が求める支援を申請することにより、連携機関が把握し、サービスの提供が行われる。親自身の人生を楽しむよう託児やベビーシッター制度も充実しており、親と支援者との連絡・相談には、IT活用が行われていた。

(3)平成27・28年度(プログラム実施)

各回のアンケート結果を以下に述べる。

参加状況：第1回18名、第2回15名(悪天候)、第3回21名。3回連続参加9名、2回参加9名、1回のみ参加11名であった。

講義内容：「重点を短時間でまとめわかりやすかった」「原点に戻れた」「障害はない子の育児にも共通する」「自立の促し方がわかった」「遊ぶことの大切さがわかった」等

グループワーク：「自分だけではないとわかり気が楽になった」「講義でわからない所が具体的に聴けた」「自分の場合どうすればよいか確認できた」「意見交換できて参考になった」等

託児：「託児ありの講演会は大変助かった。」

3回シリーズのプログラムで、スタッフと母親との関係構築ができたことも重要であった。また託児を行うことにより、子の様子がわかり、母親の悩みなどが理解できる機会がもてた。今後、開催時期(インフルエンザの流行・雪などの悪天候)、父親参加や託児担当者の人数確保などの検討を行い、母親のストレスマネジメントなどの心理教育を開催していく予定である。

引用文献

田中康雄：発達障害の早期発見・早期療育, *そだちの科学*, 4(18), 2012.

早樫一男, 団士郎, 岡田隆介：知的発達障害

害の家族援助, 金剛出版, 2002.

古澤亜矢子, 浅野みどり：思春期の広汎性発達障害の子どもを中心とした家族システムの健康維持, *家族看護*, 9(2), 160-171. 2011.

福山和女：貧困におけるクライアントのリジリアンスを動かす, *家族療法研究*, 33(3), 252-268, 2016

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 0件)

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

舞弓 京子 (MAYUMI Kyoko)
久留米大学・医学部看護学科・准教授
研究者番号：50352191

(2)研究分担者

坂本 明子 (SAKAMOTO Akiko)
久留米大学・文学部社会福祉学科・准教授
研究者番号：40469359

(3)研究分担者

森本 紀巳子 (MORIMOTO Kimiko)
久留米大学・医学部看護学科・教授
研究者番号：80268953

(4)研究協力者

坂本賢治 (SAKAMOTO Kenji)
久留米大学病院・作業療法士

(5)研究協力者

井上宏恵 (INOUE Hiroe)

久留米大学病院・助産師

(6)研究協力者

西依知哉(NISHIYORI Tomoya)

久留米大学病院・看護師

(7)研究協力者

西田志保(NISHIDA Shiho)

久留米大学・医学部看護学科・講師

(8)研究協力者

貞方恭子(SADAKATA Kyoko)

鳥栖市子育て支援センター・保育士

(9)研究協力者

藤原由泰(FUJIHARA Yoshiyasu)

久留米大学・医学部看護学科・助教

(10)研究協力者

江口真梨子(EGUCHI Mariko)

前久留米大学・医学部看護学科・助手

(11)研究協力者

兒玉尚子(KODAMA Naoko)

久留米大学病院・看護師

(12)研究協力者

金苗さやか(KANNAE Sayaka)

前久留米大学・医学部看護学科・助手